

音
男子版

登場人物 男1／堂上直道

男2／蓮華達也

男3／水野晴夫

男4／不破満作

男5／反町隆士

おじさん／欄橋雄三(納留業者)

先生／柴ゆきお

廊下。

先生と対峙している生徒達。

男1 先生。

先生 はい。

男1 僕ら先生に聞きたい事あるんですけど。

先生 えー…。

男1 なんでそんな嫌そうなんですか。

男5 先生のくせにいい。

先生 あ、ごめんなさい、はい。

男1 この学校は、男女共学なんですよね？

先生 はい。

男1 じゃあどうして男子ばかりなんですか？

先生 え？

男1 だからどうして女子居ないんですか？

先生 あ、居ません？

男1 居ませんよ。え？居ないでしょ？

男2 居ないよ。居ない、居ないよー。

男1 居ませんよ。

先生 ああ…。

男1 ああ、じゃなくて、どういう事ですか？どこかに隠してるんですか、女子。

先生 え？

男1 これは例えはの話です。それくらい女子に遭わないって事ですよ！

男5 僕らもう二年なんです。今まで一回も女子に会った事ないです。

先生 そうなんですか？

男1 どういう事ですか、この二年間たまたま女子の入学が無かっただけとでも言うんですか？

先生 うーん…。

男1 もともとこの高校は女子校だった訳でしょ？僕らが入学する前の年は。てことはさ、僕らが一年の時

時は二年三年は女子ばかりじゃない普通？

先生 はい？

男1 だから二年三年に女子が一人も居ないのはおかしいじゃないですか！僕らが一年の時、その時の、

二年三年はどこ行っちゃった？おかしいなあと思ってもう一年半経っちゃったじゃないですか。どう

してくれるんですか僕らの高校生活、もうホント無駄な事に気遣って、半分来ちゃったじゃないですか。どう

か。どうしてくれるんですか！

先生 うーん、でもみんなもうすぐ卒業じゃないですか、大行ったら女子大生にも会えますし、

男1 それは女子「大」生でしょ？所詮女子「大」生でしょ？僕らは今この時を言っているんです。女子

「高」生と一緒に過ごせる時間は人生の中でたった三年間しかない。その貴重な三年間を無駄に過

せと、そう言うんですか先生は？

先生 え？

男1 これは別に僕らが女子に会いたって言ってる訳じゃないんで誤解しないで下さいね。僕等が問題

にしているのはこの学校の事なんです。この学校の隠へい体質を問題視しているんです我々は。

男2 いじめとか天下りを公表しろって言ってるんじゃないんです我々は。

男5 女子の居場所を教えてくださいって言っているんです我々は。

先生 居場所って言われても…。

男5 風紀委員だ！

男2 学校の犬め…！

男3 二年B組堂上、蓮華、反町。もう下校の時間だよ。

男2 クソ…。

男1 だって男女共学なんですよ？これじゃあ男子校じゃないですか。

先生 (苦笑して) ああ…。

男1 え、何笑ってるの？え、何笑ってるの？

先生 あ、すいません。

男1 これじゃあ何の為にこの学校に入ったのかわかんないですよ僕ら。
先生 え？

男3 (手帳を取り出す)

男1 そりゃあわかってますよ！学生の身分は勉強だつて事くらいわかってますよ。でも女子居ると居ないのとじゃ全然そのモチベーションが違いますからね。

先生 はあ。

男1 だからホント良かったなあとは思ってるんですよ女子居なくて。女子なんか居たらもう邪魔臭いですからね、もう勉強に支障が出ますから、うんざりして。

男5 うるさいよお、女子は話し出すと止まらないらしいから。

男1 でしょお？だから良かったなあとは思ってるんですよ。

男3 (手帳をしまう)

先生 ……ん？

男1 どうしてくれるんですか！

男5 どうしてくれるんですか！

男2 どうしてくれるんですか！

男3 (手帳を取り出す)

先生 なんで今頃言うんですか？

男1 なんで今頃言うのかなんて聞く普通？

先生 ……すいません。

男1 今頃だからですよ、もう二年も二学期ですからね。あと半年で、卒業ですからね、唯一残った三年の女子は、あと半年で居なくなっちゃうんですよ、こりゃ言っとかないと気が済まないって話ですよ。

先生 え？つまりどういう事ですか？皆さんは女子生徒が居なくて良かったと思ってるんですよね？

男1 そうですよ。だつて女子の先輩がうじゃうじゃいると思つてやってきてるからねこっちは。

男2 気持ち悪いよ。

男1 気持ち悪いよねえ？

男2 うん。

先生 じゃあ良かったじゃないですか。

男3 (手帳をしまう)

男1 ……ん結果的にはね！でも結果ですからね。結果良ければ全てイイって訳でもないですからねこればかりは。だつてこれ詐欺みたいなもんですよ。

男2 詐欺…？

男1 だつて詐欺でしょ？女子校が今年から男女共学になりますつて言つたらたいいの男子は飛び付くよそりゃ。

男3 (手帳を取り出す)

男1 僕らは違いますよ！僕らの話じゃなくてね。
先生 はあ。

男1 だからそれを利用して入学者増やそうとしたんでしょ？違います？

先生 いや、どうなんですかねえ？

男1 どうなんですかねえじゃなくて、それが普通の男子的発想だつて言つてんの。

先生 はあ…。

男1 でも実際入学してみたら女子一人も居ないなんて、それは詐欺でしょう？ねえ？

男2 あ、うん。

先生 あのお、

男1 はい。

先生 でも会つたことありますよ僕。

男1 ……え、女子に？

先生 はい。

男3、ボールペンを落とす。

生徒達 え、え？え？いつ？！

先生 いや、いつつて言うか…、

男5 は？え、何組？何年？

先生 いや、何年何組かはわからないですけど…、

男5 なんで判んないの？先生でしょあんた？

先生 ちよつと皆さん、声…、

男1 どこどこで見たの？

先生 いや廊下ですれ違つて…、

男3 え、え、何階の廊下ですか？

先生 いや、もう覚えてないけど…、

男2 (男3に) なんで君が入つて来るんだよ。

男3 どんな感じなんですか？

男1 え、何回くらい会ったことあるんですか？
 先生 いや、まあ、結構…。
 男5 結構ってどれくらいですか！
 男2 ちよつと落ち着こうよみんな。
 男3 どんな感じなんですか！
 男5 結構ってどれくらいですか…。
 男2 みんな一旦深呼吸しよ！
 男1 しないよ！
 男2 しない？よし！
 男3 え、じゃあ居るって事ですか？この学校にも女子。
 先生 まあ、そういう事だと思っんですけどねえ、
 男1 え、じゃあなんで会わないんですか、僕等は。
 先生 うーん…。
 男1 どういう事ですか？何階の廊下に出没するんですかその女子は。
 先生 そんな、熊じゃないんで…。
 男1 熊と女子を一緒にするなんて、それちよつと問題発言ですよ先生。
 先生 あ、すいません…。
 男2 え、何時限目とか覚えてないんですか？
 先生 いや、割と普通に歩いてますから、ええ。
 男5 ふぎけんじゃねえぞこの野郎！（殴りかかろうとする）僕ら一回も見たことないですよ！見たこと
 ないんですよ！見たことない人達に向かつて、割と普通にー？バカにしてんのかー！
 先生 えー？！
 男1 ちよつといかん、こいつ興奮しすぎだ。
 男2 うん、お前ちよつと座れ。
 男5 だって…、だってバカにしてんじやないかよ…（体操座り）。
 男1 それは何ですか？かたまって歩いてるんですか？
 先生 …え？
 男3 どんな感じなんですか？
 男1 だから、複数居るんですか？
 先生 いや…、
 男3 大きいんですか？

先生 何が？
 男2 その時は何人居たんですか？
 先生 まあ、一人、かなあ。
 男2 一人？
 男5 匂いは？
 男1 かなあ、つて何？なんでそんな曖昧？ねえ、ホントに見たんですか？
 先生 見ましたよ。見たのは間違いないですから…、
 男5 どんな匂いなんだよ！
 男1 じゃあなんで一回も見ないんですか僕らは！
 先生 皆さんは会いたいですか女生徒に？
 男1 僕らは別にいいですよ！
 男2 うん、僕らはほんと、女子なんて、ええ。
 男3 風紀が乱れますからね、女子居ると。
 男5 どつかに居るんだと思うだけでもう、邪魔臭いね！。
 生徒達 うん…。
 先生 …あのお、皆さんね、あんまり大声で騒いでると、怒られちゃいますよ、他の先生に。
 男1 この壁の向こうには何があるんですか？
 先生 え？
 男1 どうしてこんなに高いんですかこの壁は。
 男5 まるで刑務所だよお。
 先生 ああ…。
 男1 なんの為に存在するんですかこの壁は。
 先生 うーん、僕じゃあ良く分からないんで、学長に直接聞いて貰った方が、
 男1 学長様に直接なんか聞ける訳ねえだろうがよ！
 男2 先生が聞いてよ！先生が！
 先生 僕が？
 男1 バカー！
 男3 先生が自主的に聞いてよね！
 男5 僕らは関係ないですからね！
 男1 バカー！
 先生 …。

男2 学長とか言ってるんじゃないよ…。

男1 バカー！

男3 何言ってるんだよ…。

男5 何言ってるんだ。

男1 バカー！

先生 いや、僕ももう学長の事はホント…、

男2 みんなちよつと落ち着こう。先生の言ってるのはたった一人だけの女子かもしれない。

男1 そうか、そうだね。

男3 一年に女子が入ったという話は聞いてないよ。

男2 なんにしろ、今突っ込んででも大死にだ。

男1 うん。そんなどこの馬の骨の女子かもわからないギリギリの女子に一喜一憂してもしょうがない、

僕らが探しているのは海のような女子だ。

男5 ん？

男1 海のように広がる女子の群れだ。

男5 あ、うん！

と、納品業者のおじさんが下手からやってきた。段ボール箱を抱えている。

おじさん あのお。

先生 あ、どうも…、ご苦労様です。

おじさん 三年の、川口先生のクラスは、どこですかね？

先生 あ、川口先生…？えー、どこだろうなあ、ちよつと待って下さいね、

先生、行こうとする。

男3 どこ行くんですか？

先生 職員室。

男3 職員室なんて行きませんかよ。

先生 あ、でも、川口先生の…、

男2 なんにも知らないんですね、先生。

男1 先生は、ちよくちよく会うんですよね？

先生 まあ、ちよくちよくつていうか、まあ、はい。

男1 ちよつと一緒に歩きましょうよ。

先生 え、どこを？

男1 校舎内ですよ。

先生 でもこの時間は、居ないんじゃないかなあ…。

生徒達、先生を睨みつけている。

男4、やってくる。

男4 モテナイ奴に限ってぎゃあぎゃあわめき散らす、喉潰すぞ。

男1 君は誰だ？

男5 転校生の不破君だよ。名古屋の学校からやってきたんだ。

男2 へん、これだから都会の学校の奴は嫌なんだい。

男4 君達が女子に会えない理由を教えてやろう。音痴だからさ。

男1 なに？

男4 女って奴は歌が上手い奴に惚れる。

男5 歌？

男4 僕はこの学校に、合唱部を作る。

男2 合唱部？

男4 お前らみんな、入れ。

先生 あ、それいいんじゃないですか？みんな合唱部作りなよ。

男3 歌が上手くなつたところで寄ってくる女子が居ないんだよここには。

男4 居るじゃないか、この向こうに。

男1 え？

男3 き、君はこの壁に向かって歌う気かい？そんな事したら学長にものすごく怒られる。最悪の場合退学だ。

男4 僕らは合唱部なんだ、どこに向かって歌おうが勝手だろ。

先生 いや、ここじゃなくてね、

男1 やつぱりそうか、間違いない！この壁の向こうには女子がうじゃうじゃ居る！

男2 ええ？！！

男1 そうだ、風紀委員なら知ってるんじゃないか？この壁の向こうに何があるか。

男3 知ってる訳ないだろ。

男2 水野、本当の事言えよ。

男3 本当に知らないんだよ。向こう側の事は考えちゃいけない事になってるんだい校則で。

男1 なにそれ変な校則！

先生 なんにも無いよ、この壁はただの壁ですから、

男5 道理でこつち側は女子テニス部も女子卓球部も、女子と名のつくものは存在しない。女子トイレだつて無いんだよ。

男1 男子校だよそれ！

男4 確かめてみようじゃないか。この壁に歌つてさ。

男3 どうなつても知らないからな。

男4 大丈夫だよ、僕らには今、先生がついてるんだ。

先生 …は？

おじさん あのお？

先生 あ、すみません。行きますね。

先生、袖をつかまれている。

男4 なあみんな、男女共学というのは、女子がいつも当り前に目の前に居るんだろう。そこに居る男子は毎日どんな気分だと思う？

男2 女子に囲まれた男子なんて、歌が上手い奴に決まってる…。

男5 勉強じゃあ僕らに勝てないからカラオケでモテようって魂胆なんだ。

男2 なんだよカラオケつて…、ボックスで歌つて何が楽しいつて言うんだ。狭い空間に、女子とき、窮屈だろうがよ。

男4 そいつらに聞かせてやろうじゃないか僕らの合唱をさ。

男1 君はそんな当り前の青春を、僕らの合唱で消せると本気で思ってるのかい？

男4 例え一人一人の力は弱くても、みんなで力を合わせればきつと勝てる！

生徒達 ……！

男4 お前らこのままでいいのかよ？そいつらだつて俺達と同じ高校生だ。似たような時に似たような土地に生まれ、食べ物も変わらなければ背格好だつてそう変わらんだろう。なのになんだこの差は。お前から悔しくないのか？女子に、会いたくないのか…！

男1 …会いたいです！…今まで、なんとか楽しんでモテようと思つてたけど、汗水垂らしてまでモテたく

ないつて思つてたけど、…今は、なんとしてでも会いたいです！

先生 (指を立て) シー。

男2 …僕も、会いたい！会いたいよおー！会いたい…。(泣きたす)。

男5 僕だつて、僕だつてこのまま高校生を終わらせたくないです。だから、会いたいです！

先生 すいませんね、

おじさん あ、いえ。

男3 本気か？僕等はあと半分で卒業なんだ、今まで我慢してやつてきて、いいのかい？こんなところで卒業を諦めても？リスクが高過ぎるよ。

男4 水野、君はなんの為にこの学校に入ったんだ、卒業する為に入ったんじゃないだろ。

男3 …。

男4 恐いなら辞めろ、だが邪魔はしないで貰いたい。

男2 水野、無事に卒業すること、高校で女子に会つて事は、同じくらい価値のある事なんだと僕は思う。

男3 蓮華…。

男2 思い出せ！小学生の頃血眼になってエロ本探してた時の君を。あの時の汗は、本物だつたら？

男3 …。

男4 どうする水野？俺はお前に、僕らの「ミ」になって貰いたい。

先生 あ、頭文字？ねえ頭文字？

男3 …会いたい、僕も会いたい。会いたいです！

生徒達 会いたいです！

男4 よおし、お前たちの気持ちは良く分かった。じゃあ僕はこれから、お前達を殴る。

先生 は？

男4 いいな、堂上。

男1 はい！

男4 俺はお前の名前が気に入った。歯を食いしばれ！

先生 名前じゃん。

男1をグーで殴る男4。

先生 わ、わ…、

男4 次、蓮華！

男2 はい！

男4 頼むぞ！

男2 はい！

殴る。

先生 ちよつと…、

男4 水野！

男3 はい！

男4 お前は風紀委員だ、いいのか？

男3 …こんなバツジ、こうしてやる！

男3、バツジを外してポケットにしまう。

男4、殴る。

男4 反町！

男5 はい！

殴る。

先生 名前だよ？君達名前で選ばれたんだよ…。

男4、先生も殴る。

先生 痛ーっ！

男4 いいか、俺だつて痛い！この痛みを忘れるな！

生徒達 はい！

屋上。

おじさん (楽譜を見ながら) オッフエンバック、天国と地獄。

先生 それを合唱するって言ってるんですけどね…、大丈夫かなあ、屋上にまで上がったって。

男1 おい不破君、オッフエンバックって何かものすごくヤライ歌なんじゃないだろうな。こんな歌うたってPTAに怒られても知らないぞ。

おじさん (「天国と地獄」を口ずかすむ)。

男5 運動会だ…。

男3 全然やらしくない…。やらしいとははるか遠い位置にあるものだ。

男1 小学校の、徒競争だね…。

♪「天国と地獄」が聞こえてくる。

男2 …あの頃はこんな高校生活を送るなんて思いもしなかった…。

男5 女子がたくさん居たんだ。

男3 好きな子いじめてさ。

男2 今思うとなんて勿体ない事してたんだろうって思うよ。

男5 チップスターの容器にちんこつつこんでさ、

男2 そんな事はしなかったけどね。

男5 やつてるとは今と変わらないんだもん。

男1 今もやつてるのかい？

男5 気がつくとね。

男1 僕等は身体だけが大きくなって、世界はどんどん狭くなって行く。

先生 音楽やつてたんですか？

おじさん 一時、先生を目指してたんです、音楽の。

先生 だから納品業者に？

おじさん これは家業なんですけどね。

男4 僕らは個々の力で挑んでも、女子は振り向いてくれない。

男2 そんな事はわかってるよ、どうしたらいい。

男4 合唱なら、一人の力が何倍にも膨れ上がる方法を知っている。

男5 なんですかそれは？

男4 我々の作戦は、ドレミファソラシ、七つの音を七人で分担し、ひとりひとりの負担を減らすとともに、一つの音に集中することで個々の力を最大限にまで引き上げる。一人一曲マスターしている時間は僕らにはない、七人で一曲マスターするんだ。

男2 七人…
男5 ここには、五人しか居ないぜ。
男4 あと二人、仲間が必要だ。
男1 あては？あてはあるのかい？
男4 あてはある。
生徒達 え？
男4 先生を見る。
先生 …え？
男4 先生、名前は？
先生 …柴 ですけど…
皆 おおー！
先生 イヤですよ。
皆 …。
先生 僕、先生ですから。
男1 あとは「ア」か。
先生 …。
男5 どこかにライオン君とか居ないかな。
先生 ライオン君なんか居る訳ないでしょうバカ。
男3 みんな、ごめん…。
男2 水野。
男3 僕やつぱり帰るよ。
男2 え？
男3 だって「ミ」のつく名前なんて、幾らでもあるだろ。A組の三浦 あいつでいいじゃないか。
男5 お前なんだよ急に、ここまで来て。
男3 みんなは学長に会った事無いからさ…、ものすげー怖いんだぜ。噂じゃ目が赤く光るって話だ。
男5 え…。
男2 …僕は高校生なんだ、殺される訳じゃないだろ。
男3 一生癒えない傷を負う事だってあるんだ。
男5 何をされるって言うんだ…。

男3 勝手に屋上登ったりなんかしてさ、これだって充分校則違反なんだからな。
男4 先生が連れて来たって言えはいいよ。
先生 コラコラ！
男1 学長はね、ハマーに乗ってる。ハマーってのは米軍の軍用車を民間用にリフォームした車なんだ。学校の長が軍用車に乗ってるってどうなのそれ。…って思ってる奴居ると思うよ。
男2 軍用車に乗ってる人なんかに敵う訳ないよな。
男1 そうだよ。…それでもね、
男2 うん…。
男1 男には、負けると分かってもやらねばならない時がある！なぜ男女共学なのに男子しか居ないのか。そして女子の先輩達はどこに消えてしまったのか。
男2 …僕も、僕も知りたい。
男1 大きな疑問を抱えたまま卒業して、この三年間を無かった事にするなんて僕には耐えられない。
男5 僕だってそうさ。僕らの三年間は、ただただ壁に向けてため息を吐くだけじゃないんだよ。
男1 言っておくが僕は女子なんか居ても居てもどっちだっていいんだぜ！
男2 どっちも居るよ！それどっちも居る！
男5 だって女子なんか居たら面倒くせーよ！あいつら足腰が弱いんだろ？僕らこうして屋上で話してるけどいつこつちに転んで来るかってうかうか話もしてられない。
男2 それは助けてあげる為？
男5 違うよ、ぶつかって来られたら困るんだ。僕らは大学受験を控えている。こんなところで変な腕のつき方してたらんよ、鉛筆握れないぜ。
男2 受験は来年だけだぜ！
男1 転ぶ勢いで抱きつかれてたらんよ、…もう気持ち悪いよ。細くてさ。きつとびっくりするほど細いんだぜ、女子って奴は。
男5 変な匂いするんだ、きつと。
男1 するする、あのデパートの一階みたいな匂いね。
男5 そうそう、あれくっせーんだ。
男2 あれはどうして一階に化粧品売り場があるか知ってる？
男1 え、知らない、なんで？
男2 地下に食品売り場があるだろ、その匂いを消す為さ。
男1 へー、なるほどね。
男5 ねえその話どうでも良くない？

男2 そうだよ、どうでもいいよ。女子くらいどうでもいいよ。

男1 そうだよ、どれくらいどうでもいいかって事の例え話してたんだよ。イイ例えだったよ。

男2 ありがとね。

男1 どう致しまして。

男5 このように僕等はけつして女子の事が気になってるんじゃない！

男1 この学校の体質の事を言っているんだ。この学校を変えていかなくちやならない、それが僕ら二年の役目なんだ。

男2 その通りだね！

男1 その為には君のような立派な風紀委員が必要さ。

男2 来年の、新一年の為に、僕らが頑張るんだ。

男5 うん！

おじさん しょうがねえな。

先生 え？

おじさん 私、欄橋です。欄橋ゆうぞう。

皆 おおー！

先生 いやいや、この人は納品業者さんですからね、

男4 先生！僕らの「シ」になって下さい。

皆 お願いします！

先生 あのね皆さん、歌いたいならこんなところじゃなくて、ちゃんと音楽室を借りなさいよ。壁の向こうに歌つても女子生徒なんて居ませんから。こんなものは所詮学長の作戦なんです。必要以上に高い壁を作つておいて君達の心を惑わせる。それだけの事なんです。結局怒られるだけです。からやめときなさい。

皆 頭を下けたまま。

おじさん …やつてあげたらどうだい？

先生 え？

おじさん せっかくこんなやる気になってるんだ、先生が助けてあげないでどうするんだい？

先生 おじさん…。

おじさん ここまでやる気になっている彼らを、今まで見たことありますか？

先生 だって、訳わかんないし…

おじさん 先生ね、世の中訳のわかる事はかりだったら、そんな世界は面白いかい？訳のわからない事があるから、人は成長するんじゃないのかい？可能性は、訳の分らないところから始まるんだ。

先生 …。

おじさん 彼らのやろうとしている事を、わからないというだけで否定するのは止めてください。

男1 納品業者…。

皆 口ぐちに「納品業者」とつぶやき、頭を上げていく。

先生 …なんでそんな急に向こう側に行っちゃったんですか？

おじさん 彼らは気づいてないんです、今の彼らの衝動こそが、青春だと言う事を。

生徒達 納品業者…！

おじさん 私からもお願いします先生、彼らの助けになってやってくれ。

男1 お願いします、先生！合唱部に入ってくれ。

生徒達 お願いします！

先生 …もおわかったよ。

生徒達 いえーい！

先生 その代わり、僕は「ド」がやりたい。

男4 「ド」はダメですよ、もう堂上君が居るから。

先生 僕は「ド」以外はやらない。「ド」はやつぱりかっこいいから。

男4 先生いいかい、音に優秀はないんだよ？

先生 何度も言うけど僕は先生なんだ。先生が「ド」じゃないとかっこつかないだろ。

男4 子供だよなあ。

男2 ひどいよそんな、後から入って来て勝手に「ド」の音をやらして欲しいだなんて、

男5 それはちよつと横暴ですよ先生。

男4 堂上君も何か言いなよ。

男1 じゃあ僕「ミ」やります。

男4 じゃあ決まりだ。先生は「ド」ね。

先生 しょうがないなあ。

男5 ちよつと待って、でも「ミ」は水野君が居るよ。

男2 じゃあ僕が、「ソ」をやろう。

男1 でも「ソ」は、反町君たち。

男5 じゃあ僕、「フア」をやります。

男4 じゃあ僕が「シ」だ。

男1 何このスムーズな展開。まるで初めからその音で決まっていたみたいなスムーズさだ。

おじさん ちよおちよお君達ちよお、「ド」柴「レ」水野「ミ」ドノウエ「フア」反町「ソ」レンゲ「シ」不破、ややこしいわ。

男5 でもこれは僕らがやりたい音を選んだ結果なんです。

男1 僕も最初「ド」がイイって言ったんです。「ド」はやっぱ最初の音だし、リーダーみたいだから。そしたら、

男4 「ド」が最初なんて誰が言ったんだい？「ド」の前には「シ」があるんだぜ。

男5 「シ」の前には「ソ」、

男2 「ソ」の前には「ソ」、

男4 「ソ」の前には「フア」、

男1 ってこいつらが言うから僕は「ミ」にしたんです。

男5 僕はドノウエ君は「ド」の上なんだから、「レ」がいいんじゃないかと言ったんですがね。
おじさん もうええわ。じゃあ行くぞ。

おじさん以下、皆椅子に座る。

男1 ほら、水野、何やってんだ。

他 水野。

男3 …。

男4 もうすぐ日が暮れる。この壁の向こうに女子が居るとしたら、きっと下校の時間だ。

先生 僕にやれるだけの事はやってみますよ、やれるだけの事しかやらないけど。

男3 …もう誰に聞かれたってかまやしない。

男3も、座る。

皆、身構える。

おじさん いちにのさん はい！

天国と地獄

オフエンバク

Musical score for the first part of 'Heaven and Hell'. It features a piano introduction with a melody in the right hand and a bass line in the left hand. The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings like 'Alto'.

Musical score for the second part of 'Heaven and Hell', starting with a '2' time signature. It continues the melody and bass line from the first part, with more complex rhythmic patterns and musical notations.

「天国と地獄」を歌いだした。音をはるか遠く飛ばす様に。

いつの間にかサイレンが鳴り響いている。夕焼けが目に沁みる。

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp